

御土居跡

一史跡 御土居と御土居跡を歩く
1591年、文禄・慶長の役で朝鮮との戦を始めの一年前、豊臣秀吉は大規模な京都改造事業に取り組んでいます。塙の秀次に関白職を譲って聚楽第を明け渡し、2~4ヶ月のスピードで京都の町を囲む22.5キロにおよぶ御土居堀を構築しました。その他、寺町、寺之内、本願寺等の寺割りや短冊形の町割り等の事業も行いました。真竹等が植えられたという京都の美観にも貢献した御土居史跡をめぐる、秀吉の町づくりの痕跡をたどります。道路の起伏が当時の想像をかき立てます。

1 北区紫竹上長目町・上堀川町(加茂川中学院)
御土居の北東角の屈曲部分にあたり。堀川通に分断されていますが、通りの東側と西側に土塁の土盛りを確認することができます。

2 北区大宮土居町(玄塚下)
保存状態が最も良く、約250mにわたって御土居が現存しています。金網で囲われており外側からしか見学できませんが、堀と土塁の構造がよくわかる御土居です。

3 北区鷹峯旧土居町2
御土居の北西角に当たる部分です。向かいの光悦堂さんに鍵を借りて中へ入ることができます。

4 北区鷹峯旧土居町3(御土居史跡公園)
公園として整備された御土居。土塁の頂部まで登ることができ、その高さを体感できます。

5 北区紫野西土居町
住宅地の一角にわずかに土塁が残ります。西土居町という地名にも御土居の名残を感じます。

6 北区平野鳥居前町
台形の土塁に芝が植えられており、指定史跡の中でも、その形状が最もよく分かります。道路脇には御土居から出土した石仏が祀られています。

7 上京区馬喰町(北野天満宮境内)
境内西側に残る御土居の頂部には見晴らし台が設けられ、土塁構築の際に植えられたとされるケヤキの大木があります。

8 中京区西の京原町(市五郎稲荷神社)
土塁に接して社殿があり、御土居そのものが神体となっている稲荷神社です。鳥居が並ぶ参道部分が堀跡といわれています。

9 上京区寺町広小路の北之辺町(盧山寺)
境内墓地の東側に御土居の一部が約50mほど残ります。北端から土塁に登り、見学することも可能です。

10 北区大宮土居町(玄塚下)
保存状態が最も良く、約250mにわたって御土居が現存しています。金網で囲われており外側からしか見学できませんが、堀と土塁の構造がよくわかる御土居です。

11 北区鷹峯旧土居町2
御土居の北西角に当たる部分です。向かいの光悦堂さんに鍵を借りて中へ入ることができます。

12 北区鷹峯旧土居町3(御土居史跡公園)
公園として整備された御土居。土塁の頂部まで登ることができ、その高さを体感できます。

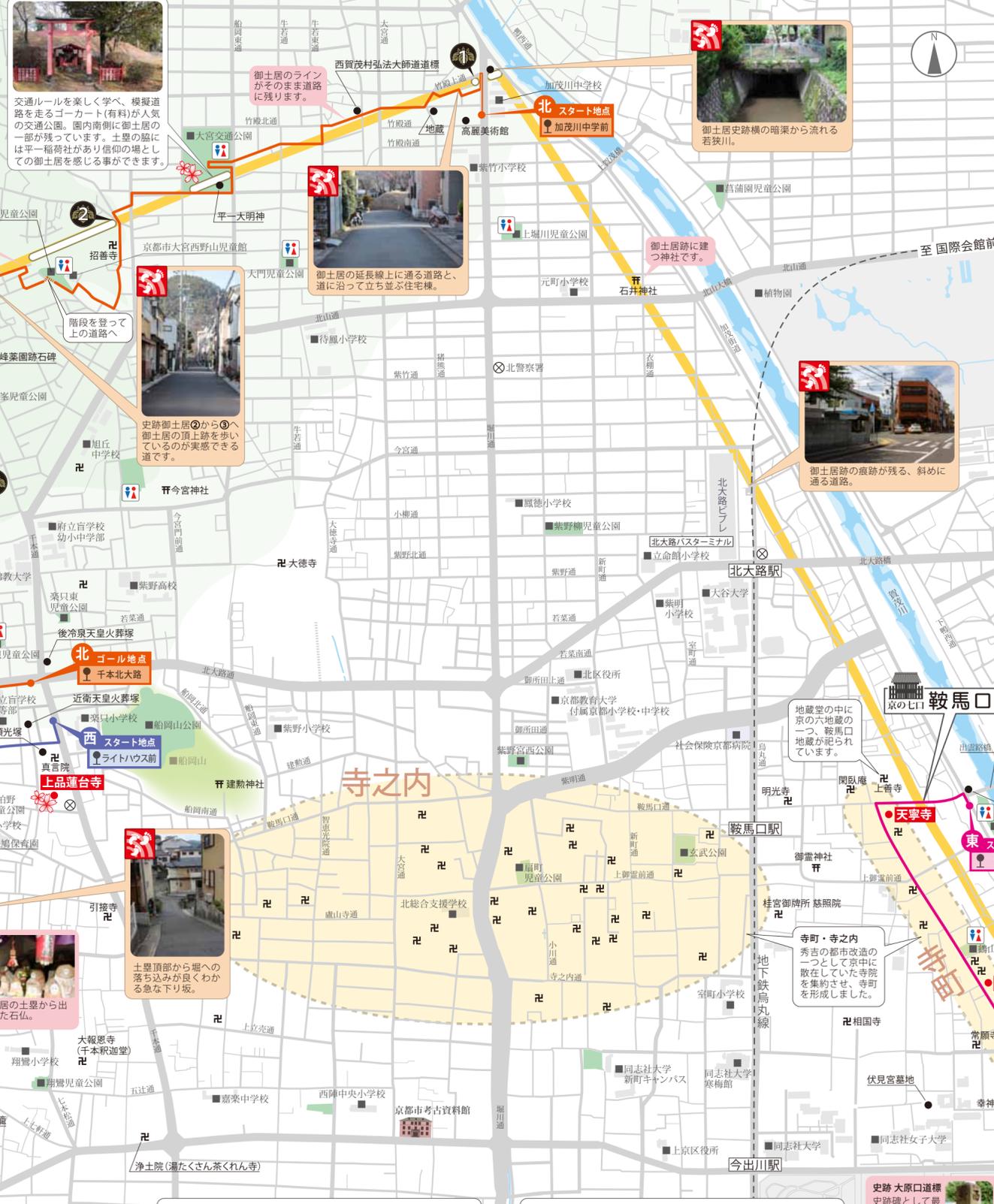
13 北区紫野西土居町
住宅地の一角にわずかに土塁が残ります。西土居町という地名にも御土居の名残を感じます。

14 北区平野鳥居前町
台形の土塁に芝が植えられており、指定史跡の中でも、その形状が最もよく分かります。道路脇には御土居から出土した石仏が祀られています。

15 上京区馬喰町(北野天満宮境内)
境内西側に残る御土居の頂部には見晴らし台が設けられ、土塁構築の際に植えられたとされるケヤキの大木があります。

16 中京区西の京原町(市五郎稲荷神社)
土塁に接して社殿があり、御土居そのものが神体となっている稲荷神社です。鳥居が並ぶ参道部分が堀跡といわれています。

17 上京区寺町広小路の北之辺町(盧山寺)
境内墓地の東側に御土居の一部が約50mほど残ります。北端から土塁に登り、見学することも可能です。



西コースの見どころ
上品蓮台寺
平野神社
北野天満宮
東向観音寺

東コースの見どころ
天寧寺
阿弥陀寺
盧山寺
梨木神社



御土居跡



～文化財と遺跡を歩く～ 京都歴史散策マップ



発行 京都市・財団法人埋蔵文化財研究所



京都市考古資料館

大正3年に本野精吾の設計で建てられた旧陣織物館を内部改修し、京都市内の発掘調査・研究の業績を発表・展示するため昭和54年11月に設立されました。特別展と常設展で構成され、約1000点の遺物が展示されています。遺物展示のほかにも、映像やパソコンで旧石器時代から近世にかけての京都の歴史を学ぶことができます。建物は、昭和59年に京都市有形文化財に登録されています。

〒602-8435
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265-1
TEL. 075-432-3245 FAX. 075-431-3307
http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/

入館無料・月曜休館(月曜が祝日の場合は翌日)
開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)

JR京都駅より地下鉄烏丸線 今出川駅下車徒歩15分
市バス201・203・59系統 今出川大宮下車すぐ



御土居跡に関する発掘調査

「本能寺の変」後、羽柴秀吉はいち早く行動をおこし、戦国の騒乱に終止符を打つことができました。秀吉は天正13(1585)年に関白職を受け、天正14年に豊臣の氏を賜り太政大臣に就任し政権を確立しました。同時に京都の改造を始め、まず、同年に聚楽第の造営を開始しその周辺に大名屋敷町を建設します。次に天正17年から御所の修復を行い、その周辺に公家屋敷町を配置します。天正18年には寺院を強制的に集中させ寺町・寺ノ内を形成すると共に、同年、平安時代からの正方形町割りを短冊形町割りとし土地の有効活用を図ります。最後に、天正19年、その周囲を取り囲むように御土居を築きました。この御土居は外敵の襲来に備える防壁と川の氾濫から街を守る堤防として、北は上賀茂から鷹ヶ峰、西は紙屋川から東寺の西辺、南は東寺南側の九条通、東は鴨川西側の河原町通まで、南北約8.5km、東西約3.5km、総延長約22.5kmにも及びます。その構造は外側に堀を巡らせ、内側に掘った土を盛り上げて台形状の土塁を築いたもので、土塁上には竹が植わっていたようです。現存するものから推測すると堀の幅は約20mで、深さは約4mとみられます。土塁基部の幅は約20mで、頂上部の幅は約5m、高さは約5mありました。近衛信尹の「三藐院記」によると天正19年1月に着手され、同年閏1月のわずか2ヶ月で完成したようです。他の文献などにも5月以降には、工事の記載がなくなっていることから、早くも2ヶ月、遅くとも4ヶ月で完成しています。この大規模な土塁と堀が一日に150mずつ完成していったこととなります。この工事に携わった



人は「その数しれず」と吉田兼見の日記には記されています。この時期、京都では方広寺造営、寺院街建設(寺町や寺ノ内)あるいは御所の修築などの工事が並行的に行われており、京の町は人であふれかえっていたことでしょう。御土居は豊臣秀吉が作った頃には「土居堀」と呼ばれていましたが、江戸時代になると土塁、特に竹林のほうに注目が集まるようになり「御土居」と呼ばれるようになりました。御土居の内側を洛中、外側を洛外と呼び、「京の七口」に代表される出入口は、当初10ヶ所しかありませんでしたが、江戸時代の初めには40ヶ所まで増えていきます。江戸時代に入ると、鴨川に新たな堤防ができ、東側の市街化が進み、土塁は取り壊されて行きますが、北・西・南側の土塁や堀は維持されました。近代になると京都ステーションの建設や郊外への宅地化が進み、第二次大戦後は土塁の大部分が消失してしまい、北西部を中心にわずかに残るだけとなりました。現在では9ヶ所が国の史跡に指定されています。

1 中京区西ノ京中保町



2 中京区西ノ京円町



3 下京区中堂寺南町



4 下京区朱雀堂ノ口町



5 下京区朱雀堂ノ口町



6 下京区朱雀正会町



7 南区西九条鳥居口町



8 南区西九条春日町

